

# ワシ類の鉛中毒について

くろさわ・のぶみち  
ワシ類鉛中毒ネットワーク  
代表、野生動物救護研究会  
副会長、本会会員。職業は  
農業共済組合獣医師。

## 黒 沢 信 道

本文のポイント

近年北海道で増加している、オジロワシとオオワシの鉛中毒とはどういうものか、どのような重大な問題であるのかを紹介し、現状と防止対策、今後とられるべき対策や問題点について述べる。

### 野鳥の鉛中毒

鉛中毒と聞いてまず思い浮かぶのは、十年前に美瑛市の宮島沼で大発生したハクチョウの鉛中毒であろう。宮島沼は水鳥の飛来地として、また水鳥猟の盛んな場所として有名だった。ところが一九八九年の四月下旬から五月にかけて多数のオオハクチョウとコハクチョウが死亡し、その原因が、水鳥猟によって水辺に堆積していた鉛散弾を食べたことによる鉛中毒であると明らかにされたのである。それ以前にも鉛汚染は報告されていたが、これほど大量に、しかも狩猟目的でない鳥が死んだことで大問題になった。

もともと水鳥の鉛中毒は外国では古くから注目されていた病気で、野鳥に与える被害が大きいことから、欧米諸国ではすでに水辺での鉛散弾の使用は禁止されているところが多い。また水鳥にとどまらず、鉛散弾を食べた水鳥をさらにハクトウワシが食べ、二次的な鉛中毒で死亡することもわかっている。北米では三百羽以上のハクトウワシが被害にあったと記録さ

れている。

宮島沼での鉛中毒は、翌シーズンから猟友会が沼での銃猟を自粛、北海道庁の手で砂利をまいたり沼底にネットを張ったりの措置がとられたものの、翌一九九〇年春にはハクチョウとマガンで百羽以上の被害が出た。この後少し下火になっていたが、問題は解決されたわけではなく、一九九八年には再び大きな被害が発生したと報じられている。また関係者の待望している鉛散弾の使用規制は、今に至るまで行われる気配がない。現在でも野放し状態が続いているのである。

### 新たな鉛中毒の発生

一九九六年二月、網走市の海岸で拾われたオオワシの死体が、環境庁釧路湿原ワイルドライフセンターの斎藤慶輔獣医師によって解剖され、鉛中毒が死因であることが判明した。しかしこの時、胃のなかから発見された原因物は水鳥猟用の鉛散



鉛中毒で死亡した多数のオオワシ  
(ワシ類鉛中毒ネットワーク提供)

弾二個で、ハクトウワシに起こったような鉛中毒が日本のオオワシでも起こっていると関係者は認識した。そして不幸にもこのことが、その後の対



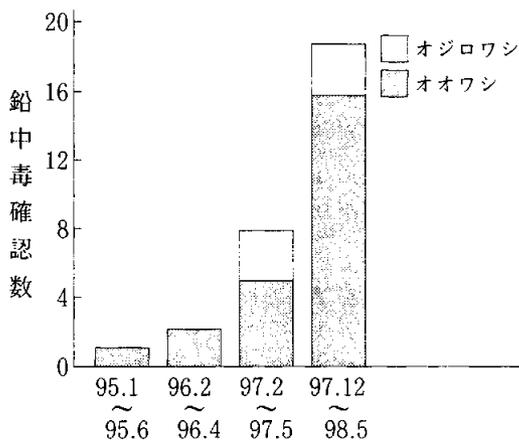
鉛中毒死したオオワシの胃にある鉛の破片  
(ワシ類鉛中毒ネットワーク提供)

応を遅らせる原因のひとつになったとも言える。同年三月に、白糠町の山奥で収容されたオオワシが釧路市動物園に搬入された。やせて衰弱が激しく、数日後に死亡したが、血液の検査で鉛中毒と診断された。しかしながら原因は不明のままであった。動物園の記録では、この年の二月から三月にかけて、ほかにもオオワシ四羽、オジロワシ一羽の衰弱個体や死体が搬入されている。さらに記録をさかのぼると、一九九五年にも、一月から五月までにオオワシ七羽、オジロワシ一

羽の搬入があり、これらのうちのほとんどが、本来の生息地と考えられていなかった山奥での収容であった。

一九九七年、一月と二月に網走管内で収容されたオオワシとオジロワシの死因を追及していた、斜里町知床博物館の増田泰獣医師らは、この二例の死因が鉛中毒であると診断し、原因物として胃のなかからシカの毛とともにあったライフル弾を発見した。

また二月から四月にかけて釧路管内で収容されたオオワシ四羽を解剖した斎藤獣医師は、これらが鉛中毒であることを確認し、胃のなかから散弾とは異なる微細な鉛の破片を検出した。増田獣医師の場合と同様に胃のなかからシカの毛が大量に出てきたことから、これらの原因をエゾシカ猟に使われたライフル弾の破片と断定し、早急な対応をとるよう環境庁に進言している。この年に判明



ワシ類鉛中毒発生確認数の推移  
(98年9月までに判明分)

したワシ類の鉛中毒は最終的に八羽となった。さらに次のシーズンには、報道等で話題になったこともあってか、十二月から九八年五月までに十九羽もの被害鳥が発見される異常な事態となったのである。

### 鉛中毒の増加した原因

本来オジロワシとオオワシは、海岸や河口などの水域を主な生息地としており、食物も魚や水鳥である。特に北海道内では、知床半島の羅臼町に多数集結している時期があった。これらは主に、羅臼沖で盛況だったスケソウダラ魚のおこぼれに依存していた。しかしこの十年ほど漁模様が芳しくなくなり、ワシは新たな餌を求めて分散し始め、風蓮湖や野付半島での越冬数が増加した。またこのころ道東地方ではエゾシカが増加し始め、それまであまり確認のなかった阿寒などの山間部で頻りに観察されるようになった。これは、交通事故などで発生するシカの死体を食べているのだと考えられていたが、このころから狩猟による死体も食べていたかもしれない。

一九九五年一月には、シカによる農林業被害を低減しようと、雌シカ猟が阿寒周辺など一部地域で解禁となり、その後年々狩猟期間や可猟区も拡大されてきた。また同時に有害獣としての駆除頭数も増加してきている。このため、射殺したものの、必要な部分だけを切り取って残りを山林内に放置したものや、回収されないままの死体が増加したと考えられる。ワシ類の鉛中毒の増加は、これらと時期を同じくしていることに疑いはない。もっとも、当初はシカ猟と鉛中毒の関係に疑問の声もなかったわけではない。それは「ライフル

弾は獲物を貫通してしまふので、鉛が死体に残ることはないのではないか」という意見であった。

それに見事に答えたのは、一九九八年春に北海道庁の行った調査であった。有害駆除でしとめたシカの死体を使って、弾が貫通しているかどうかを精査し、さらにレントゲンを撮ったのである。多くのハンターが言うように、調べた死体のうち

八割のケースで弾が貫通していた。これからすると、弾の残っている死体を食べて鉛中毒になる確率は低いとも考えられる。しかしレントゲンの結果は明らかにこれを否定した。弾本体が貫通した死体のすべてに、無数の鉛の破片が残留していることがわかったのである。つまりライフルの弾は、シカの体を突き抜けていく過程で、弾頭に含まれる鉛を小さな破片にして肉や内臓の中にまき散らしながら進むという事実が示された。その結果、野外に放置されたシカの射殺死体には、ほぼ百パーセント鉛の破片が鉛弾そのものが残っており、それらを食べたワシは高い確率で鉛中毒に陥るといふことがわかったのである。

### 鉛中毒がワシ類に与えるインパクト

ワシ類の鉛中毒が近年増加していることはわかったが、ではそれがオジロワシとオオワシの個体群に対してどのような影響を与えるのであろうか。

ご承知の通りオオワシはロシアの極東地方で繁殖し、北海道から千島列島にかけての地域で越冬する。このうち、日本に飛来する個体群は多く見積もっても二千羽である。またオジロワシは一部北海道で繁殖するものもあるが、多くのものは北海道を越冬地として利用おり、日本での越冬数は六百羽程度と言われている。これらが北海道で越

冬する間、当然いろいろな事故や病気で死亡することもあるわけだが、昨シーズン中に拾得された死体は両種合わせて二十五例であった。実にこのうち十九例が鉛中毒だったわけで、拾得された死体に限って言えば、驚くなけれ七十六%が鉛中毒が原因で死亡したのである。これが個体群の動向に影響を与えないはずはない。

またオオワシについては、日本野鳥の会の植田睦之研究員がコンピューターを使用した個体数推移のシュミレーションを行っている。今までの各種データから推測されているオオワシの個体数変動は、五十年後まで現状維持か、やや減少で推移するという。ところが昨シーズン十九羽が鉛中毒で死亡したことから、単純に一%を死亡率に上乘せして計算すると、五十年後に半数以下になってしまうという結果が出た。

しかしこれはあくまで発見された死体の数から計算したもので、実際に死んでいる数が、発見された数の五倍や十倍であることは容易に想像がつく。また被害鳥のデータからは、幼鳥より成鳥の被害が大きいと考えられており、成鳥の方が多く死亡するとしてシュミレーションしたり、死亡しない個体でも繁殖能力が低下するなどの要素を加味すれば、いよいよとんでもない早さで個体群の絶滅に向かっていくことになるであらう。

### 鉛中毒防止への取り組み

鉛中毒の基本的な解決は、鉛製弾丸の使用禁止であることは言うまでもない。このことは、容易にも見えない困難にも思える。鉛散弾の使用規制が期待されながら、はや十年間もただ過ぎてしまつたわが国の今までのやり方を見ていると、楽観は

できない。

もう一つの改善策は、シカの放置死体の回収である。これは根本的な解決にはならないが、部分的な即効性はある。一部のハンターによるものと思うが、シカ猟の現場は放置された死体で惨憺たる光景である。この点では行政も取り組みを始め、ハンターの間にも意識が芽生えているのは大変ありがたい。しかし半矢で逃げるシカや回収不能死体がかなり存在すると考えれば、その効果のほどは未知数である。

また北海道が苦慮しているのは、平成十年度から開始したエゾシカ保護管理計画との関係であろう。この計画の是非については、私自身は確たる意見を持っていない。しかし基本的に銃を用いた狩猟と駆除で個体数の大幅な削減を計画している以上、鉛中毒防止に関する配慮を避けては通れないと思う。ワシの鉛中毒が表面化したときに、道庁の担当の方々が「エゾシカ管理計画に対する横槍か」と感じたとしても無理はないが、計画を遂行するうえで、適切な鉛中毒対策を期待したい。この原稿を書いているのは平成十年の十二月中旬であり、まさにこれから今シーズンの鉛中毒の動向が分かってくる時期に当たるとも思われるので、現時点での論評は控えたい。代わりにこの問題解決に向けて、行政とハンターのみに任せられておいて良いのかという気持ちから発足した、民間団体「ワシ類鉛中毒ネットワーク」の活動を紹介しよう。

この会はワシ類の鉛中毒防止に向けて、鉛中毒に関するデータの収集と分析、ワシの生息状況やシカ猟についての実態把握、防止策に向けての提

言と啓蒙活動などを目的に活動しており、平成十年十月には、行政やハンターも参加するワークショップを開催した。現在はフィールド調査に加えて、シカの放置死体の埋却、ワシ以外の鳥での被害の調査、過去のデータの再検討や分析を行っている。

ワシ類鉛中毒の防止に関しては、これまでにならぬ広い範囲の協力と多岐にわたる活動が必要とされ、まさに官民の協力が試されていると言っても良いかもしれない。

### ワシから環境へ

鉛は、水銀、カドミウムと並ぶ三大有害重金属のひとつである。ゴミ処分場周辺でのチェック項目のひとつにもなっているし、大気中に鉛をまき散らした反省から、ガソリンが無鉛に替わったのも、記憶にそう古くはない。鉛は便利な金属であったが、その有害性ゆえに今は環境から排除されつつある金属と言える。現在、数ある鉛含有製品のうち消費が減少していかないのは弾丸と釣り重りだけではないかとも言われている。いずれ鉛を環境中に放出すること自体が問題視されるようになるだろう。

鉛中毒は、オオワシ、オジロワシにとっては絶滅の言葉さえちらつく重大な問題である。また別の意味では、この有害物質の環境中への放出に対する警鐘でもある。これを愛鳥家がヒステリックに叫んでいる問題ではなく、立派な環境問題であると多くの人たちが理解することができれば、流れは解決に向かって一気に加速していくのではないかと感じている。

1998年(平成10年)7月29日(水曜日)

# オオワシ、オジロワシ



「オオワシ」の繁殖地。オオワシの繁殖地は、オオワシの繁殖地。オオワシの繁殖地は、オオワシの繁殖地。

# 鉛中毒死は100羽以上

道東の研究者グループが推計

## 数年後、絶滅の恐れも

道東の研究者グループが推計、オオワシ、オジロワシが、ワシ類鉛中毒の被害を大きく受けている。道東の研究者グループは、オオワシ、オジロワシの繁殖地を調査し、オオワシの繁殖地は、オオワシの繁殖地。オオワシの繁殖地は、オオワシの繁殖地。

道東の研究者グループは、オオワシ、オジロワシの繁殖地を調査し、オオワシの繁殖地は、オオワシの繁殖地。オオワシの繁殖地は、オオワシの繁殖地。

道東の研究者グループは、オオワシ、オジロワシの繁殖地を調査し、オオワシの繁殖地は、オオワシの繁殖地。オオワシの繁殖地は、オオワシの繁殖地。

### 参考資料

野鳥を脅かす鉛中毒(植田睦之) 野鳥一九九八年十一月号、日本野鳥の会〇三一五三三八―三五一〇

ワシ類鉛中毒釧路ワークショップ要旨報告書、ワシ類鉛中毒ネットワーク〇一五四―五六―二〇五二

ワシ類鉛中毒ネットワークホームページ  
<http://WWW.marimo.or.jp/~wrbp/lead.htm>

北海道新聞  
1998年7月29日